はしがき

故大隅逸郎教授の研究生活は長く固疾心臓病のために苦しめられた。このままの状態では後四、五年の寿命しか見込まれない、という宣言と、心臓手術としては比較的容易な手術で全治が可能であるという診断の結果、万一の危険を予測されないわけではなかったが敢て手術を決断せられるに至ったようである。万一にもと考えられた手術の不成功は、しかし、現実のものとなってしまった。まことに忽然として、大隅教授は不帰の人となられた。去年十一月十二日のことである。痛恨愛惜の極というほかない。その家庭には若き夫人と幼き三児が突如その支柱を奪われて残されたのである。損失はわが法学会にとっても大きい。近来着々とその野心的な研究成果を発表せられたその学才と健筆とは遂に永遠に葬られることになった。故人が心血を傾倒された近代中国政治史に関する労作は今後の同志社法学において再び見ることを得ない。

故大隅教授は人から敬愛される天性の魅力を備えておられた。教師として学生諸君から捧げられた尊敬、学究として同僚から受けられた友愛、それは、故人の葬儀に際して、又、遺家族に対しての支援と同情において感銘深く示されたのであった。故人の人徳に因るものと思われる。

今、故人を記念してこの追悼号が特輯せられることになった。追憶を新たにすると共に、故人の学績を更に進展せしめるために一段の努力を尽したいものである。

同志社法学会代表　秋山哲治